



Title	述語の断定性と補文の文性
Author(s)	柏本, 吉章
Citation	Osaka Literary Review. 1981, 20, p. 32-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25571
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

述語の断定性と補文の文性

柏 本 吉 章

1. 補文の文性

本論は、Hooper (1975) で論じられた断定的述語 (assertive predicate) の補文の特性を、補文の文性という観点から捉え直そうとするものである。

次の二種類の補文を比較したい。

(1) a. I think John is mistaken.

b. I regret that John is mistaken.

(1a), (1b) の補文のうち、(2)の独立文に性質のより近いものはどちらであろうか。

(2) John is mistaken.

(1a) の *think* は断定的述語である。その補文の命題は、話者によって主張されている。これに対し、(1b) の *regret* は真の叙実的述語 (true factive predicate) であり、従って非断定的 (nonassertive) である。この場合、補文の命題は主張されず、前提となっている。一方、(2)の独立文では、話者が 'John is mistaken' という命題を主張していることは明らかである。

以上のように見てくると、命題の主張という点において、(1b) の *regret* の補文より、(1a) の *think* の補文の方が、より独立文に近いということがわかる。ここで、「節がどれだけ独立文に近い性質を持つかの度合」を、節の「文性」として捉えると、(1a) の補文は、(1b) の補文より、文性が高いということになる。

命題の主張は、陳述文の根本的な機能である。従って、この機能に欠ける節は、それだけ文性が低いと言える。このように、本論では、文性というものを文の機能的な面から捉えることにする。¹⁾ 以下では、話者による補文命題の主張を、補文の文性の尺度の一つとし、断定的述語の補文の

文性について考察してゆきたい。

2. 断定的述語

Hooper (1975) は、断定的述語・非断定的述語の区別と、それと交差するものとして、叙實的述語 (factive)・非叙實的述語 (nonfactive) の区別とを組み合わせ、全部で五つのクラスの述語を分類している。次にあげるのは、そのリストの一部である。

非叙實的			叙實的	
断定的		非断定的	断定的	非断定的
弱断定的 (weak ass.)	強断定的 (strong ass.)		〔半叙實的〕 (semifactive)	〔真叙實的〕 (true factive)
(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
think	admit	be (un)likely	discover	regret
believe	assert	be (im)possible	know	resent
suppose	claim	doubt	notice	forget
expect	insist	deny	realize	be odd
imagine	say	neg + strong ass.	remember	be sorry
guess	agree		see	
seem	be afraid			
appear	be certain			
	hope			

断定的述語と非断定的述語の違いは、補文の前置の可否に表われる。断定的述語の補文は、その一部又は全体を主節の前に置くことができる。²⁾

- (4) a. The wizard will deny your request, I *think*.
 b. He wants to hire a woman, he *says*.
 c. The winters are very cold here, the guide *explained*.
 d. She was a compulsive liar, he soon *realized*.

[Hooper (1975: 94, 116)]

一方、非断定的述語は、このような補文の前置を許さない。

- (5) a. *Many of applicants are women, it's *likely*.
 b. *Herman has not finished his work, I'm *sorry*.

[*Ibid.*: 94, 116]

Hooper によると、前置された補文は、文の主主張になる。従って、主張を表わす断定的述語の補文は、前置が許される。これに対し、主張を表わさない非断定的述語の補文は、前置が許されない。

ここで、前節でも見たように、命題の主張を補文の文性の尺度として考えると、断定的述語の補文は、非断定的述語の補文より文性が高いということが出来る。

次にわれわれが問題としたいことは、断定的述語の補文における主張のあり方である。(4a) - (4d)の文において、補文の前置は、補文命題の主張を裏づけている。しかし、(4a) - (4d)の補文は、いずれも同じように話者の主張を表わしているのであろうか。さらにいくつかの例文を検討しよう。

- (6) a. It's trying to kill to keep yourself alive, *I imagine*.
—E. Hemingway, *The Snows of Kilimanjaro*.
- b. That means, *I suppose*, that you have not read my books.
—A. Christie, *Peril at End House*.
- c. "There will be fortune hunters, *I'm afraid*,"... —*Ibid*.
- (6') a. It's trying to kill to keep yourself alive. [cf. (6a)]
b. That means that you have not read my books. [cf. (6b)]
- (7) a. They were, *I supposed* vaguely, what was called the off-beat generation. —A. Christie, *The Pale Horse*.
- b. It is absolutely safe, *she thinks*, to take the pistol from its hiding place and ... —A. Christie, *Peril at End House*.
- c. She was still a good-looking woman, *he thought*, and she had a pleasant body. —E. Hemingway, *The Snows of Kilimanjaro*.
- (7') a. They were what was called the off-beat generation. [cf. (7a)]
b. She was still a good-looking woman and she had a pleasant body. [cf. (7c)]

(6)の述語はいずれも一人称・単純現在時制である。一方、(7)では、三人称又は過去時制の述語が使われている。そして、(6'), (7') は、それぞれ(6), (7)の補文に対応する独立文である。

これらの例文を検討してゆくと、次のような二つの疑問点が出てくる。

〔1〕 (6)の補文と、(6')の独立文とは、全く同じ主張の機能を持っているのだろうか。

〔2〕 (7)の三人称又は過去時制の述語がとる補文は、(6)の一人称・単純現在時制の述語の補文と同じように、話者の主張を表わしているのだろうか。

以下、この二つの疑問点の説明を求めて、議論を進めてゆくことにする。まず、次節では第一の問題点について論じたい。

3. 主張の緩和

think, believe, suppose など一般に思考動詞と呼ばれているものは、Hooper の分類では、弱断定的述語として分類されている。これらの動詞が一人称・単純現在時制で使われる時、主節は何ら主張を成さず、話者は補文の命題のみを主張するということは、よく知られている。

(8) I think it is difficult to get along with John.

(9) It is difficult to get along with John.

(8)の補文は、(9)のような独立文に非常に近い機能を持っているように思われる。このことは、これらの述語を含む文では、補文から付加疑問が形成されるという事実からもわかる。

(10) a. This car needs a tune-up, doesn't it?

b. The Yankees will lose again this year, won't they?

(11) a. I think this car needs a tune-up, doesn't it?

b. I suppose the Yankees will lose again this year, won't they?

[Hooper (1975:103)]

では、(8)の補文と(9)の独立文において話者は 'It is difficult to get along with John' という命題を全く同じように主張しているであろうか。

ここで、Karttunen (1973) が提出している次のような文を考えたい。

(12) #It isn't raining in Chicago, but it may be raining there.

[Karttunen (1973:3, 4)]

- (13) I think it isn't raining in Chicago, but it may be raining there.
[*Ibid.*]

(#はその文が語用論的に奇妙であることを示す。)

(12)が奇妙であるのに対して、(13)が奇妙でないのはなぜなのか。³⁾ (12)が奇妙なのは、文の前半で“*It isn't raining Chicago*”という命題を主張しておきながら、文の後半では、それと矛盾する命題を主張しているからである。これに対して、(13)が奇妙にならないのは、*think*の補文は、独立文の命題と同じように主張されていないからではないだろうか。確かに、(13)の文の前半でも“*It isn't raining in Chicago.*”という命題が主張されている。しかし、この場合、*I think*という主節によって、その主張が緩和されると言えるのではないか。この緩和された主張は、後に矛盾する命題の主張が続くことを許す。⁴⁾他の述語の補文についても同じことが言える。

- (14) a. #John is alive, but he may be dead.
b. #Mary is a good cook, but she may not be a good cook.
- (15) a. I believe John is alive, but he may be dead.
b. I suppose Mary is a good cook, but she may not be a good cook.

以上のように、一人称・単純現在時制で使われる弱断定的述語の補文は確かに独立文に近い性質を持つが、独立文の主張よりも緩和された弱い主張を表わすことがわかる。

次に強断定的述語の場合を考えてみる。(12)と同様のテストを試みよう。

- (16) a. #I assert that it is raining in Chicago, but it may not be raining there.
b. #I'm afraid John is dead, but he may be alive.

結果は独立文の場合と同様奇妙な文になる。強断定的述語は、弱断定的述語のように、命題の主張を緩和するようなことはない。従って、後に、矛盾する内容の主張を続けることはできない。

この事実から、弱断定的述語の補文より、強断定的述語の補文の方が、より独立文に近い機能を持つこと、言い換えると、より文性が高いことがわかる。

さて、このような弱断定的述語と強断定的述語の補文の文性の違いは、補文に起る遂行動詞 (performative verbs) の遂行性の有無によっても観察される。

- (17) a. I promise you not to tell that to anyone.
b. I forbid smoking in the hall.

- (18) a. I believe I promise you not to tell that to anyone.
b. I think I forbid smoking in the hall.

(18)の文を発話しても、話者は約束行為や禁止行為を遂行したことにはならない。⁵⁾ また、(19)のような文では、命名式の場合、しかるべき人が発話しても、命名の儀式は成立しない。

- (19) I suppose I name this ship Liberty.

(18)や(19)の文(の発話)では、*think*, *believe*などの述語を含む主節が、補文における発話行為の遂行を妨害している。従って、これらの補文内では、遂行動詞はその遂行性を失ってしまう。この点においても、弱断定的述語の補文は、独立文と性格を異にしている。

同様の遂行動詞を、強断定的述語の補文に埋め込んだ場合はどうであろうか。

- (20) a. I admit that I concede the election.
b. I announce that I hereby promise to be timely.
[Gazdar (1979:26)]

(18), (19)とは異なり、これらの補文では、遂行動詞の遂行性は失なわれない。(20a)が発話された時、主節の *admit* という述語による承認行為の遂行と同時に、補文内の *concede* という遂行動詞によって、譲歩の行為も遂行される。(20b)に関しても同様のことが言える。*promise* が遂行動詞として働いていることは、*hereby*という副詞が挿入されていることからわかる。

この事実からも、強断定的述語の補文が、独立文に極めて近い機能を持つことがわかる。そして、弱断定的述語の補文よりも文性が高いことも明らかである。

4. 間接的主張

この節では、断定的述語が、一人称・単純現在以外の主語や時制をとる場合の補文について考えてみる。

まず、次のテストから始めることにする。

- (21) a. John believes it isn't raining in Chicago, but it may be raining there.

- b. I thought that Mary was dead, but she may have been alive.

(21a), (21b) はどちらも全く自然な文である。これらの文の前半では、補文の命題は、それぞれ、John の belief として、過去の話者の belief として主張されており、文の話者は、直接その命題を主張してはいないと考えられる。また、これらの文の前半が、話者の緩和された主張を表わしているのでもないことは次のテストでわかる。

- (22) John believes it isn't raining in Chicago, but it is raining there.

- (23) #I believe it isn't raining in Chicago, but it is raining there.

文の後半を法助動詞抜きの強い主張にすると、前半が話者の弱い主張を表わす(23)はおかしくなるが、(22)は全く自然である。この事実に基づくと、(22)の三人称の述語をとる補文は、話者の主張を表わしていないと考えられる。

また、述語が三人称や過去時制の場合には、補文からの付加疑問形成が不可能であることも、それらの補文が話者の主張を表わしていないことを示す。

- (24) a. *John believes that Mary has parted with her car, hasn't she?

- b. *I thought Jim would win the race, wouldn't he?

しかし、このように、断定的述語でも一人称・単純現在時制以外で使われる場合には、補文は話者の主張を表わさないと結論づけると、次のような事実はどう説明すればよいのであろうか。

まず、第2節で見たように、補文の前置は述語が三人称や過去時制の場合にも可能である。

また、Menn (1974) は、次のような観察をしている。彼は、(25)の質問に対して、(26a-c)の文が答えとして許されると言う。

- (25) Where's Harry?
- (26) a. Joan thinks he left.
b. Joan says he left.
c. Joan hopes he left. ⁶⁾

これらの事実は、三人称や過去時制の述語の補文も、やはり何らかの形で話者によって主張されていることを示している。

結論としては、これらの補文における話者の主張は、一種の含意によるものではないかと考えたい。話者が、Xという人のある命題の主張を、そのまま報告するということから、話者自身もその命題の真について、肯定的意見を持っていることが推測される。結果的には、話者は、その命題を、自分で言質を与えることのできない、他人任せの極めて不確かな情報として「主張」したことになる。しかし、この間接的主張は、一人称・単純現在の補文によって行なわれる主張よりずっと弱いものであることは明らかである。

さて、ここで注意すべきことは、三人称や過去時制で用いられる述語には、二種類の用法があるということである。Urmson (1952) によって論じられた、挿入節的用法と非挿入節的用法 (parenthetical use / non-parenthetical use) である。

Urmson (1952:230-31) は、次のような例をあげて、この二用法の違いを説明している。

- (27) Jones believes that the trains are working.

話者(仮にSmithとする)が この文を発話する状況が二つ考えられる。一つは、Smith が、Jones の "I believe that the trains are working." という発言を聞いてそれを他の人に伝える場合である。この状況では、(27)は一

種の間接話法 (oblique oration) になっている。従って、Jones が “The trains, I believe, are working.” と挿入節を使って言った場合には、Smith は “The trains, Jones believes, are working.” と報告することになる。このような *believe* の用法を、挿入節的用法と呼ぶ。この用法では、話者は、補文の命題を間接的に主張していることになる。

一方、(27)の文は、次のような状況でも発せられる。Smith は鉄道が事故で不通になっているのを知っている。その Smith が、Jones がいつものように駅へ向うのを見て、(27)のように言う。この場合の *believe* には、「信じている」と訳すことのできるような記述的意味が含まれている。これが、*believe* の非挿入節的用法である。この用法では、主節を挿入節にすることはできない。また、話者は補文の命題を主張していない。

(25), (26)で見たように、三人称の述語の補文が、質問に対する答えになりうるのは、述語が挿入節的用法の時のみである。

(28) What happened to the railway?

- (29) a. The trains, Jones believes, are working.
b. Jones believes that the trains are working.

(29b) は、*believe* が非挿入節的用法の時には、(28)の質問に対する答えにならない。

以上のように、断定的述語も、三人称や過去時制で使われる時には、話者による補文命題の主張は、間接的で極めて弱いものになる。従って、補文の文性も、一人称・単純現在の述語の補文に比べるとかなり低いといえることができる。

5. 結 び

本論で論じた、補文の文性の決定要因をまとめると次のようになる。

- (30) 高 ——— 文性 ——— 低
(A) 断定的述語の補文 > 非断定的述語の補文
(B) 強断定的述語の補文 > 弱断定的述語の補文

- (C) 一人称・単純現在時 一人称・単純現在時制
 制の述語の補文 > 以外の述語の補文

補文の文性は、(C)のように、述語の性質そのものとは直接関係がない要因にも影響されるが、基本的には、述語の断定性に左右される所が大きい。

本論で論じたように、補文の命題が話者によって主張されているかどうかという基準は、補文の文性を考える際の非常に重要な要因である。このような機能的な面から捉えた文性は、これまであまり論じられていないようであるが、文を構造面から捉えた統語的文性ととも、研究の価値のある興味深い問題である。

注

- 1) 「文性」は、文の統語的要素(時制、主語の名詞句、補文化子など)の有無という構造的な面から捉えられる場合もある。Nakamura (1976) 参照。
- 2) 補文の前置は、見方を変えると、主節を挿入節 (parenthetical) にする操作とも考えられる。
- 3) Karttunen (1973:16-17) は(12)と(13)の違いを knowledge があるかないかという点で説明しようとしている。
- 4) (13)が自然な文であるためには、文の後半の主張も、法助動詞 *may* を含む弱い主張になっていることが必要である。
- 5) (18a, b) で発語内行為が全く成立しないとは言いきれないかもしれない。しかし、*I believe, I think* 等の主節が、遂行動詞に対して、'hedge' (障害) になっていることは確かである。Lakoff (1972), Fraser (1975) 参照。
- 6) 三人称の場合、弱断定的述語と強断定的述語の差はあまりはっきりとは現れてこないの、ここでは、この区別は問題にしないことにする。

参 考 文 献

- 荒木一雄, 小野経男, 中野弘三(編) (1977) 『助動詞』研究社
 Austin, J. L. (1962) *How to Do Things with Words*, Oxford U. P.
 Fraser, B. (1975) "Hedged Performatives," in Cole, P. and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics Vol. 3, Speech Acts*, Academic Press.
 Gazdar, G. (1979) *Pragmatics*, Academic Press.
 Hooper, J. B. (1975) "On Assertive Predicates," in Kimball, J. (ed.) *Syntax and Semantics Vol. 4*. Academic Press.

- Kageyama, T. (1976) "Sentence Accessibility,"
Descriptive and Applied Linguistics, Vol. 9. I. C. U.
- Karttunen, L. (1973) "Possible and Must," in Kimball, J. (ed.) *Syntax and Semantics Vol 1*. Taishukan.
- Kashimoto, Y. (1981) "Modality and Points of Reference in the Sentential Complement Structure," Unpublished Master Thesis, Osaka University.
- Lakoff, G. (1972) "Hedges: A Study in Meaning Criteria and the Logic of Fuzzy Concepts," *CLS*. 8.
- Menn, L. (1974) "Assertion Not Made by the Main Clauses of a Sentence,"
Studies in the Linguistic Sciences, Vol. 4, No. 1. University of Illinois.
- 毛利可信 (1980) 『英語の語用論』大修館
- Nakamura, M. (1976) "The Degree of S-likeness of Complement Sentence and Its Implications," *Studies in English Literature* (English Number) (1976)
- 中右実 (1979) 「モダリティと命題」『英語と日本語と——林栄一教授還暦記念論文集』くろしお出版
- Urmson, J. O. (1952) "Parenthetical Verbs," in Caton, C. E. (ed.) *Philosophy and Ordinary Language*, University of Illinois.
- Warne, J. L. (1974) "Parenthetical Expression in English," *Montreal Working Papers in Linguistics*, Vol. 2.